

ニーチェ Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844 ~ 1900

ドイツの思想家、詩人。哲学的内容を文学的に表現した多くの著作は、20世紀になって強烈な影響力を発揮し、現在なおその問題性を失わない。

プロイセン領ザクセン州レクテンに生まれ、ボンとライプツィヒの大学に学んだニーチェは、1869年、弱冠24歳でスイスのバーゼル大学に古典文献学教授として招聘された。このころ作曲家R・ワーグナー(1813~1883)と親しく交わったことが、処女作『悲劇の誕生』(1872)を書くきっかけとなった。ニーチェは後にワーグナーと訣別し、1879年にはバーゼル大学の教授職も辞して、病気に苦しみながらスイスとイタリアの各地で著述生活に専念する。以後10年間に『ツァラトゥストラ』(1883~1885)をはじめ、『善悪の彼岸』(1886)、『道徳の系譜』(1887)などの主要著作を刊行した。著作において、彼はキリスト教とヨーロッパ文明を痛烈に批判したが、当時はほとんど世に容れられなかった。

1889年1月、ニーチェはトリノの広場で昏倒し精神錯乱に陥り、以後1900年の死まで彼の精神は正常に復することはなかった。没後、遺稿は実妹エリーザベト(1846~1935)に管理され、『力への意志』等として出版されたが、彼女の思想(反ユダヤ主義、後にナチス黨員)によって歪められ、ナチスの政治宣伝に利用されることとなった。

Great Books 40 ツァラトゥストラ(Also sprach Zarathustra)

ツァラトゥストラとは、古代ペルシアの宗教であるゾロアスター教の教祖名のドイツ語形。ニーチェは、この作品の主人公である孤独な哲人をツァラトゥストラと名づけ、彼の教説というかたちで自らの思想を表現した。原題は「ツァラトゥストラはこう語った」の意であるが、ゾロアスター教とは関係がない。形式的には新約聖書の福音書にも似た宗教書の体裁をとっているとはいえ、詩的表現に富み、ある程度のストーリーをもつ文学作品としても読める。

ツァラトゥストラは、まず「神は死んだ」と断定する。この神とはキリスト教における「God」のことである。この認識を前提に、彼は民衆に**超人**を説く。超人とは、人間が自らを乗り越えて新たな段階に到達し、偉大な存在者となることを意味する。この超人はまた「大地の意義」であるとされ、宗教の説く天上的価値観と鋭く対立させられる。神の死んだ世界にあっては、時間もまた別の意味をもってくる。創造から終末に至る直線的な歴史は否定され、かつてあったことはまた繰り返し起こるという**永劫回帰**の思想が、謎めいたことばでツァラトゥストラによって語られる。

本書は通常の哲学書と異なり体系的な構成をもたず、主要な概念の定義すらない。一見混沌とした内容であるが、ツァラトゥストラのことばは比喩とイメージに満ち、その声は激しく高らかに響くかのようなものである。それは一方で現世を明るく肯定する快活と哄笑の書であり、また一方では凡人や弱者を容赦なく否定する軽蔑と差別の書でもある。多くの現代人が、心のよりどころを無くしたような不安を共通にかかえているならば、19世紀末に生まれたこの古典は今も生命力を失わないといえるだろう。

Key Word 超人(der Übermensch)

わたしはあなたがたに超人を教える。人間とは乗り越えられるべきあるものである。[略] およそ生あるものはこれまで、おのれを乗り越えて、より高い何ものかを創ってきた。[略] 人間にとって猿とは何か。哄笑の種、または苦痛にみちた恥辱である。超人にとって、人間とはまさにこういうものであらねばならぬ。

<手塚富雄(訳)『世界の名著46 ニーチェ』 中央公論社>

人間は、動物と超人のあいだに張りわたされた一本の綱である。深淵の上にかかる綱である。[略] 人間において偉大な点は、かれがひとつの橋であって、目的ではないことだ。人間において愛しうる点は、かれが過渡であり、没落であるということである。わたしは愛する、没落する者として生きるほかには、生きるすべをもたない者たちを。それはかなたをみざして超えてゆく者だからである。

<手塚富雄(訳)『世界の名著46 ニーチェ』 中央公論社>

Key Word 永劫回帰(die ewige Wiederkunft des Gleichen)

月光をあびてのろのろと匍はっているこの蜘蛛くも、またこの月光そのもの、また門のほとりで永遠の事物についてささやかかわしているわたしとおまえ、これらはみなすでに存在したことがあるのではないか。そしてそれらはみな再来するのではないか、われわれの前方にあるもう一つの道、この長いそら恐ろしい道をいつかまた歩くのではないか われわれは永劫に再来する定めを負っているのではないか。

<手塚富雄(訳)『世界の名著 46 ニーチェ』 中央公論社 >

◆ Great Books 文献案内

- 📖 ツアラトウストラはこう言った 上・下(岩波文庫ワイド版) / 氷上英広(訳)
岩波書店 1995年刊 <134.9DD / 347 / 1~2> 資料番号 20746228, 20746210
- 📖 ニーチェ全集 第2期第1巻 ツアラトウストラはこう語った / 園田宗人(訳)
白水社 1982年刊 536p <134.9L / 117 / 2-1> 資料番号 10219152
- 📖 世界の名著 46 ニーチェ / 手塚富雄(編)
中央公論社 1966年刊 630p <080 / 5 / 46> 資料番号 20744090
- 📖 筑摩世界文学大系 44 ニーチェ / 浅井真男(ほか訳)
筑摩書房 1972年刊 467p <908 / 28 / 44> 資料番号 11875663
- 📖 ニーチェ全集 第9巻 ツアラトウストラ / 吉澤傳三郎(訳)
理想社 1969年刊 826, 236p <134.9 / 24 / 9> 資料番号 10217180

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 ニーチェ(シリーズ・哲学のエッセンス) / 神崎繁(著)
日本放送出版協会 2002年刊 126p <134.94LL / 8> 資料番号 21543608
- 📖 ニーチェ(叢書・ウニベルシタス) / リュディガー・ザフランスキー(著) 山本尤(訳)
法政大学出版局 2001年刊 438p <134.94KK / 6> 資料番号 21412440
- 📖 ニーチェ(講談社選書メチエ) / 須藤訓任(著)
講談社 1999年刊 266p <134.94HH / 3> 資料番号 21196217
- 📖 ニーチェ(丸善ライブラリー) / 湯田豊(著)
丸善 1998年刊 228p <134.94GG / 1> 資料番号 21046818
- 📖 ニーチェ(講談社学術文庫) / 山崎庸佑(著)
講談社 1996年刊 503p <134.9 / 357> 資料番号 20813374
- 📖 ニーチェ事典 / 大石紀一郎(ほか編)
弘文堂 1995年刊 778p <134.9 / 346> 常置(相談室) 資料番号 20739835
- 📖 ニーチェについて / ジョルジュ・バタイユ(著) 酒井健(訳)
現代思潮社 1992年刊 404p <954AA / 212> 資料番号 20457214
- 📖 ニーチェ全集 期・期各12巻 別巻1
白水社 1979~87年刊 <134.9L / 117>
- 📖 ニーチェ 1~3(白水叢書) / マルティン・ハイデガー(著) 園田宗人(訳)
白水社 1976~77年刊 <134.9H / 104 / 1~3>
- 📖 ニーチェ全集 全16巻 別巻1 / 信太正三, 原佑, 吉澤傳三郎(編)
理想社 1962~70年刊 <134.9 / 24>